

メキシコ（2025年度）

- [国・地域別情報トップページへ](#)
- [各国・地域情勢](#)
- [メキシコ日本文化センター](#)

1. 2024年度日本語教育機関調査結果
2. 日本語教育の実施状況
3. 教育制度と外国語教育
4. 学習環境
5. 教師
6. 教師会
7. 日本語教師派遣情報
8. シラバス・ガイドライン
9. 評価・試験
10. 日本語教育略史

1.2024年度日本語教育機関調査結果

初等教育			中等教育			高等教育			学校教育以外			全体の合計		
数	教師数	学習者数	機関数	教師数	学習者数	機関数	教師数	学習者数	機関数	教師数	学習者数	機関数	教師数	学習者数
5	24	1,205	11	32	1,348	26	66	2,126	121	547	10,472	153	669	15,151

（注）2024年度日本語教育機関調査は、2024年9月～12月に国際交流基金（JF）が実施した調査です。また、調査対象となった機関の中から、回答のあった機関の結果を取りまとめたものです。そのため、当ページの文中の数値とは異なる場合があります。

[「海外日本語教育機関調査」のページへ](#)

2.日本語教育の実施状況

全体的状況

沿革

メキシコにおける日本語教育は、日本からの移民が多い他のラテン・アメリカ諸国同様に、日系人子弟を対象として始まった。榎本武揚らによる初めての入植（1897年）以降、日本人移民入植地のチアパス州アカコヤグア村で、照井亮次郎ら入植者たちによって設立された「日墨協働会社」が寺子屋式の「暁（アウロラ）小学校」を設立（1906年から15年間継続）して、日本人子弟教育として日本式のローマ字を用いた日本語教育を行った。おそらくこれが中南米での最初の組織的な日本語教育であったと思われる。戦前、墨都日本人会（のちの日墨協会）が日本語教育を行ったが、その時には日本の文部省からも教師が派遣されている（1930年）。第二次大戦中から戦後にかけても日系

人子弟への日本語教育は継続されており、1944年に中央学園開校、バハ・カリフォルニア州では、1955年からメヒカリ日本語学園が日本語教育を行っている。

1960年代になると、日系人以外の成人を対象とした日本語教育が始まった。1964年エル・コレヒオ・デ・メヒコにアジア・アフリカ研究センターが設立され、日本語は日本研究科の必修科目となった。1967年にはメキシコ国立自治大学文学部東洋研究所が日本語学科を設置、またこれに前後し日本大使館後援の日本語通訳養成コース（のちの日墨文化学院）が開講された。これは1968年のメキシコオリンピックに向けての必要性からであった。

1970年代に入るとメキシコに進出する日系企業が増加し、駐在員子弟が急増したことから、これまでの日本人学校では手狭となる一方、戦前から開講してきた日系人のための日本語学校（タクバヤ学園、トラルパン学園、タクバ学園）には、駐在員子弟のための日本人学校と統合した総合学園を建設したいという計画があった。こうした背景もあり、1977年には日本人学校とメキシコの初等・中等教育機関からなる日本メキシコ学院（小学部・中学部〔高校部は1980年開校〕）が設立され、そのメキシココース（メキシコ人児童・生徒、日系人児童・生徒が在籍）では日本語が必修科目となり現在に至っている。また同年には国立工科大学の外国語センターでも日本語教育が始まった。

1980年代後半から1990年代初めにかけては、継承語としての日本語教育が減少していくのと対照的に、外国語としての日本語教育が増加した。

2003年7月には社団法人メキシコ日本語教師会が組織され、教師向けの研修事業や日本語弁論大会の開催など、メキシコの日本語教育のレベルアップを目指した活動を展開している。

2004年の日墨経済協定前後には米国国境地域（バハ・カリフォルニア州、チワワ州、コアウイラ州、ヌエボ・レオン州）へ進出する日系企業の増加に伴い、同地域を中心に日本語講座を開設する機関が増加傾向にあったが、近年は新規に開講した機関は見当たらない。

2010年代に入ると、各教育段階において日本語教育をめぐる重要な出来事が相次いだ。

まず、2015年8月、グアナファト大学付属高校グアナファト校ならびにサラマンカ校に、日本の高等専門学校を範とした高専コースが開講した。同コースでは、メキシコの公立中等教育段階において初めて日本語が必修科目とされた（日本語授業開始は2016年1月）。続く2016年8月、グアナファト州サラマンカ市内に、幼稚園～高校部を有する私立校コレヒオ・マグノ サラマンカ校が開校し、小学部から日本語が必修科目とされた。さらに、2018年1月にはグアダラハラ大学ラゴス校サン・ファン・デ・ロス・ラゴスキャンパスキャンパス外国語・外国文化学部でメキシコで初となる日本語専攻が開設された。また、同年5月、グアナファト州イラプアト市内の私立校 Colegio Americano del Centro A.C.（小中高一貫）において、小学部と中学部で日本語が必修科目として教えられるようになった（2026年1月現在、Colegio Americano del Centro A.C.における日本語教育の存続を確認できず）。2020年には、アグアスカリエンテス州の私立幼稚園 Kinder Internacional My Little Sunshine において、日本語・英語のバイリンガル教育が開始された。また同年、チアパス州では日本語を必修とする就学前教育機関 Genki School が開園した。Genki School は2022年に小学部も開設し、こちらも日本語が必修となっている。

JF は、1972年の設立以来1997年まで、日本語教育の専門家をメキシコの主要な日本語教育機関であるエル・コレヒオ・デ・メヒコ、メキシコ国立自治大学、日墨文化学院に派遣してきた。その後、1999年4月から2003年5月、そして2009年11月から現在に至るまで、メキシコ及び中米・カリブ地域の日本語教育の発展のために、日本語専門家を国際交流基金メキシコ日本文化センター（以下、JFメキシコ）に派遣している。

JFメキシコは、JF日本語教育スタンダード（以下、JFS）と、JFS準拠日本語教科書『まるごと 日本のことばと文化』国際交流基金（三修社）（以下、『まるごと』）の普及を目指し、2012年以降、メキシコの日本語教育機関と共

催で日本語講座（以下、JF 日本語講座）を開講してきた。日墨文化学院（2012年1月～2013年12月）、日本メキシコ学院（2012年8月～2017年7月）、アジア研究学会（ACIA）（2013年1月～12月）などである。また、JF メキシコでも2014年5月からJF 日本語講座を開始した。さらに、日本語専門家によるJFS・『まるごと』普及活動が成果を上げ、同教科書を主教材として使用する機関も増加した。

2026年1月現在、先述の共催 JF 日本語講座は全て終了している。JF メキシコが行う JF 日本語講座は、2017年9月以降、日本語学習プラットフォーム「みなと」を使用したオンライン講座に移行し継続中である。

背景

今日では日本語学習者の大半は非日系人で占められており、継承語として日本語教育を行っている機関は、年少者を対象とした中央学園1校のみとなった。80年代後半から90年代に入ると多くの大学で外国語教育としての日本語講座が開講されるようになった。これらの学習者の多くは、アニメ、マンガをはじめとするポップカルチャーに対する関心が学習の動機付けとなっていると思われる。

また、2012年頃にメキシコ中部グアナフアト州を中心としたバヒオ地区に日系の自動車関連企業（マツダ、ホンダなど）が進出し始めて以降、企業内の通訳業務など日本語人材の需要が高まっていることを受け、2025年現在も同地区における日本語学習者の増加は続いている。

特徴

2024年度海外日本語教育機関調査にも明らかのように、「学校教育以外」の占める割合が最大（機関数、教師数は9割弱、学習者数は7割強）であることが、メキシコの日本語教育の大きな特徴である。また、パンデミックの影響を受け、新しいオンラインスクールも生まれている。さらに、オンラインで個人教授を行う教師も増えており、学習者にとっては自分の生活環境や生活スタイルに合わせさまざまな選択肢の中から学習方法を選べるようになっている。

また、2025年11月末日現在「みなと」累計登録者数が82,763名であることから、機関に所属せず個人でインターネットなどを使って日本語を学ぶ独習者も相当数存在すると見られる。

日本語学習者のレベルは初級から中級前半のレベルが大半を占め、中級後半から上級の学習者は少ない。

メキシコ日本語教育界の中核となるメキシコ日本語教師会は、2003年の設立以降、日本語教育シンポジウムなどの活動を継続しており、近年はメキシコのみならず中米カリブ地域とも連携を深めている。

最新動向

2021年7月よりユカタン州メリダ市、2022年7月よりアグアスカリエンテス州においても日本語能力試験が実施され、2022年度は計4都市・4会場で同試験が実施された。2023年には、アグアスカリエンテスで12月の第2回実施も始まり、同会場では年2回実施されることとなった。2025年度現在は、第1回にメリダ、アグアスカリエンテスの2都市、第2回にメキシコシティ、モンテレイ、アグアスカリエンテスの3都市で実施されている。

新型コロナウイルス感染拡大を受け、メキシコ教育省（SEP: Secretaría Educación Pública）による感染拡大防止策として、大学を含むすべての学校（私立大学を含め全国の約25万校、約3,300万人の児童・生徒・学生が対象）が1か月間一斉閉鎖された。その後、徐々にオンライン授業として再開し、2020年度は多くの機関でオンライン授

業が継続された。2021年度に入ると、オンラインと対面を組み合わせたハイブリッド型授業を始める機関が増え始め、同年度後半には多くの機関で完全に対面授業に戻ったようである。ただ、民間語学学校の中にはオンライン授業実施期間中に遠方または国外からの受講者を受け入れるようになったため、その後オンライン授業を継続しているところもある。2023年度には、新型コロナウイルス感染拡大防止のための制限及び制約はなくなった。パンデミック中、またはその後に開講されたオンラインスクールもある。

2025年度においては、パンデミック以前のように対面授業に戻している機関、対面、オンライン授業の両方を行っている機関、ハイブリッド型授業を実施している機関など、様々である。

教育段階別の状況

初等教育

日本語はメキシコ教育省のカリキュラムで認められた科目になっていないため、日本語教育を実施している公立の初等教育機関は存在しない。一方、私立の教育機関では、日本メキシコ学院メキシココース、コレヒオ・マグノ サラマンカ校、Genki School（チアパス州）の計3機関で日本語が必修科目として実施されている。

中等教育

2016年1月より、グアナファト大学付属高校グアナファト校ならびにサラマンカ校の高専コースにおいて、公立校としては唯一日本語が必修科目として教えられている（2024年2月現在グアナファト校では実施されてない）。また、メキシコ国立大学付属第2高校では課外活動として「日本語クラブ」が実施されている。一方、私立の教育機関では、日本メキシコ学院メキシココースやコレヒオ・マグノ サラマンカ校などで必修科目として日本語教育が実施されており、モンテレイ工科大学付属高校、イベロアメリカナ大学付属高校などの機関で課外活動としての日本語が開講されている。

高等教育

2018年1月にグアダラハラ大学ラゴス校サン・ファン・デ・ロス・ラゴスキャンパス外国語・外国文化学部でメキシコで初となる日本語専攻が開設された。一方、多くの大学では日本語講座が選択科目として開講されている。2023年には、チアパス州立芸術科学大学国際言語学科で、日本語が必修第二外国語として開講された。また、日本の大学と提携を結び、大学間交流に積極的に取り組む大学が増えている。主な大学として、メキシコ国立自治大学と神田外国語大学、弘前大学、東京大学など、プエブラ榮譽州立自治大学と天理大学、チャピング自治大学と東京農業大学、国立工科大学と電気通信大学、グアナファト大学と創価大学、グアダラハラ州立大学と神田外語大学、パナメリカナ大学と帝京大学などが交流事業に取り組んでいる。また、モンテレイ大学とヌエボ・レオン大学は、それぞれ長岡技術科学大学とツイニングプログラムを実施しており、両大学で日本語を学習した学生が3年次に長岡技術科学大学へ編入し、卒業時には長岡技術科学大学とメキシコの大学それぞれで学位を取得できる制度を設けている。日本研究で唯一修士の学位を取得することができるエル・コレヒオ・デ・メヒコの日本研究コースでは、日本語が必修科目となっている。

学校教育以外

就学前教育としては、日本メキシコ学院幼稚部（メキシコシティ）、Kinder Internacional My Little Sunshine（アグアスカリエンテス）、Genki School（チアパス）の3つの就学前教育機関で日本語教育が行われている。

日系人の継承語教育として始まった日本語学校は、今ではその学習者の9割以上が非日系人で占められており、もはや継承語教育という側面は消滅していると言える。現在その他教育機関の種類としては、一般向けに開放されている大学の言語センターと民間の語学学校が大半であり、学習者の多くは高校生以上である。以前は年少者のみを受入対象としてきたメキシコ市の中央学園でも、現在は成人層の日本語指導が中心である。

一方で、日本語に興味をもつ子どもたちも増えてきており、年少者を対象とした日本語クラスを開講する機関も増えている。

3.教育制度と外国語教育

教育制度

教育制度

3-6-3-3制。

就学前教育（3～5歳）、初等教育（小学校6～12歳）、前期中等教育（中学校13～15歳）、後期中等教育（普通高校または専門技術高校16～18歳）の各段階に分けられる。このうち義務教育は、就学前教育から中等教育修了の15年間である。小学校では1日4時間、年間800時間の授業が義務付けられており、午前の部、午後の部の2部制を取るところもある。中学校では1日6時間の授業が義務付けられており、午前の部、午後の部の2部制が多い。

高等教育は、①総合大学、②技術大学、③教員養成大学、④専門技術校の4種類で構成されている。一般専門課程は4年間で、専門性を高めるためにさらに半年が加わることもある。（たとえば心理学は4年だが、臨床心理学は4年半）。そのほか医学部は6年、会計学は5年など、専門によって多少の年限の違いがある。大学院は、修士課程2年、博士課程3年だが、単位制であるためこの年限で修了しない場合が多い。

教育行政

就学前教育から前期中等教育（中学校）までは、メキシコ教育省が公立私立を問わず全てのカリキュラムを認定している。公立校の予算は教育省から受けるが、私立については独立採算制である。

後期中等教育（高校）以上については教育省と国立自治大学のいずれかの管理下であり、カリキュラムの認定を受ける。私立といえども独自にカリキュラムを作成することはできない。予算的には私立は独立採算制、国立自治大学傘下は同大学から予算を受ける（国立自治大学は教育省を経由せず独自に政府から予算を受けている）。そのほかは教育省から予算を受ける。

言語事情

公用語はスペイン語。

ただし、ナワトルやマヤなど固有の言語を持つ先住民のグループが50以上存在し、州・地域によってはスペイン語とのバイリンガル教育も行われている。

外国語教育

第一外国語：英語教育が小学校から始まる。私立の学校では幼稚園から英語のクラスを開始しているところもある。大学入学の際、学校によっては外国語（英語）の成績証明書も求められるが、試験制度は学校によって異なり、メキシコ国立自治大学の場合、学部によって英語の試験が取り入れられている。しかし入学後は第一外国語として英語が必修とされている。

第二外国語：必修科目ではないが、大学によっては選択科目として卒業単位となるところもある。言語の指定は特にないが、多くの大学生が第二外国語にフランス語を選択しており、その次にドイツ語が多い。その他の言語として、イタリア語やポルトガル語、ロシア語などがあり、アジア言語としては、日本語の他に、中国語、韓国語を開講している大学もある。

外国語の中での日本語の人気

日本のアニメーションやゲーム、J-POP などのポップカルチャーの人気は依然として高く、日本語学習者数は増加している。近年は日本への旅行を目的とした学習者も増えている。2012 年以降メキシコ中部のバヒオ地区にマツダ、ホンダ、日産など日系自動車関連企業が進出し、日本語通訳の需要が急激に高まり、これらの企業に就職する日本語学習者や転職する日本語教師も増えている。

大学入試での日本語の扱い

日本語は大学入試科目として採用されていない。

4. 学習環境

教材

初等教育

日本メキシコ学院メキシココース小学部では、自作教科書が使用されている。コレヒオ・マグノ サラマンカ校では、『こどものほんご』（スリーエーネットワーク）が使用されており、Genki School では教師がテーマに合わせた教材を作成して使用している。

中等教育

日本メキシコ学院メキシココース中学部・高校部ではオンライン教材「eTRY!」（アスク出版）が使用されている。グアナファト大学付属高校サラマンカ校高専コースでは『みんなの日本語』（スリーエーネットワーク）、コレヒオ・マグノ サラマンカ校の中学部では『まるごと 日本のことばと文化』（前出）、高校部では『みんなの日本語』（前出）が使用されている。メキシコ国立大学付属第 2 高校の日本語クラブでは、『まるごと 日本のことばと文化』（前出）が使用されている。

高等教育

グアダラハラ大学ラゴス校サン・ファン・デ・ロス・ラゴスキャンパスでは、『げんき』（The Japan Times）を使用。エル・コレヒオ・デ・メヒコとメキシコ国立自治大学では『新文化初級日本語』（文化外国語専門学校）や『中級へ行こう』（スリーエーネットワーク）などが使用されている。それ以外の大学では『みんなの日本語』（前出）、『まるごと 日本のことばと文化』（前出）などを使用している機関が多い。

学校教育以外

代表的なものは次のとおり。

1. 年少者対象の日本語教育機関

Kinder Internacional My Little Sunshine, Genki School では、特定の教材は使用せず、日本の就学前教育で使われている教材や絵本などから、テーマに合わせた教材を使用している。

中央学園は教科書を使用せず、子どものレベルやニーズに合わせた授業を実施している。

日墨協会日本語学校の年少者対象コースでは特定の教科書は使用せず、プロジェクトベースの授業を実施している。

2. 成人対象の日本語教育機関

初級レベルでは『みんなの日本語初級』（前出）、『まるごと 日本のことばと文化』（前出）を使用している機関が多い。中級レベルコースの使用テキストは『中級へ行こう』（スリーエーネットワーク）、『みんなの日本語中級 1』（スリーエーネットワーク）『文化中級日本語』（文化外国語専門学校）などが使用されているが、中級、上級レベルを開講している機関はあまり多くない。

IT・視聴覚機材

学習者の多くは日本語のメディア教材や関連サイトの情報などインターネットを通じて積極的に収集している。パンデミックを機に、オンライン授業ができるような設備を整えた日本語教育機関も多い。オンラインのみで日本語を開講しているオンラインスクールも増えている。

5. 教師

資格要件

初等教育

日本メキシコ学院では日本語教師採用に際し、日本人の場合は大学で日本語教育を専攻または副専攻した者、日本語教育能力検定合格者、日本語教師養成講座修了者、もしくは教員免許を持ち、日本語教育に興味がある者という条件を求めている。またメキシコ人の場合は、学士号以上の学位を持ち、1クラス10～20名のクラスを担当する教師として2年以上の実務（小学生、中学生または高校生のクラス運営）経験があり、日本語ネイティブもしくは日本

語能力試験 N3 レベル以上の者を求めている。

中等教育

グアナファト大学付属高校高専コースでは最低でも学士号もしくは修士号の資格を求めている。

日本メキシコ学院は【初等教育】を参照のこと。

高等教育

メキシコ国立自治大学においては、教師の採用に際し、日本語、スペイン語による「教授理論」、「文字・語彙・文法の言語能力・四技能の言語使用能力」（日本語能力試験 N2 以上）、「模擬授業」の 3 科目による試験が実施され、採用条件は高卒以上とされている。採用後に昇格していくには学士号、修士号以上の学位があることが望ましく、昇格試験が行われる。その他の大学では業績や経験、学歴などの資格要件は各々異なるが、日本人日本語教師の場合は学士号以上、メキシコ人日本語教師は日本語能力試験 N4 レベル以上で採用されている。

学校教育以外

機関によって異なるが、日本人教師の場合には、日本の 420 時間日本語教師養成講座の修了者、または日本の大学で日本語教育を主専攻、もしくは副専攻した者を採用条件とするところが多い。

日本語教師養成機関（プログラム）

2010 年、メキシコ国立自治大学において、20 年ぶりに日本語教師養成コースが開講された（1 年間 460 時間）が、2011 年以降は受講者が集まらず開講されていない。

日本語のネイティブ教師（日本人教師）の雇用状況とその役割

主要日本語教育機関では日本語教育運営責任者に日本人教師が雇用されている。その他にも、経験・年齢ともにさまざまなタイプの日本人教師がおり、メキシコ人教師とともに教壇に立っている。ただし特に地方の日本語教育機関では日本語教育や言語学の専門教育を受けた経験のある教師はあまり多くない。さらに、バヒオ地区では、駐在員の帯同家族がメキシコ人から個人教授を依頼されるケースや、民間語学学校にスペイン語留学に来た日本人が在籍校から請われて日本語クラスを教えるケースなども増えている。

教師研修

メキシコ国内で広く日本語教師向けに研修などを実施しているのは、メキシコ日本語教師会と JF メキシコである。メキシコ日本語教師会は、主催事業として JF メキシコの助成を受け、年 1 回日本から講師を招へいする大規模な「日本語教育シンポジウム」を開催している。また経験の浅い日本語教師を対象にした「夏季短期集中講座」も実施している。その他、2015 年まで JICA が助成して日系人子弟対象の日本語教育機関を対象に「日本語教師合同研修会」が開かれていたが、現在は行われていない。

現職教師研修プログラム（一覧）

メキシコ日本語教師会主催、JF 助成

- メキシコ日本語教育シンポジウム：メキシコ人及び日本人日本語教師 50 名以上が参加、毎年 3 月に国内外から講師を招へいし講義とワークショップを行う。2021 年度・2022 年度は同期型と非同期型を組み合わせたオンライン形式で実施し、最近ではメキシコだけではなく中米カリブ地域からの参加もみられるようになった。2023 年度からは対面とオンラインを組み合わせたハイブリッド形式で実施されている。2025 年度もハイブリッド形式で実施する予定である。
- 夏季短期集中講座：経験の浅い教師を対象とした日本語教授法、言語、ワークショップなどの集中講座。2025 年度は「日本語教育におけるテクノロジーの活用」をテーマに、対面とオンラインを組み合わせたハイブリッド形式で 3 日間開催した。

JICA の助成による教師研修会

- 日本語教師合同研修会：継承語教育をテーマにした 2 日間の教師研修会。参加者の大半は日系団体関連日本語機関のネイティブ日本語教師。現在は実施されていない。

JF メキシコ日本文化センター主催による研修会

- オンライン研修シリーズ「こどものための日本語教育を考えよう」：メキシコ・中米カリブ地域・南米スペイン語圏でこどものための日本語教育に関わる教師、保護者を対象に、オンライン型で実施。当該地域でこどものための日本語教育に関わる人たちのネットワーク形成も目的の一つとして、日本語上級専門家と外部講師が協働で、2～3 時間程度の研修を行う。
- 地域別日本語教師研修：メキシコ国内の現職日本語教師を対象として、メキシコ国内を地域に分け、対面とオンラインを組み合わせたハイブリッド型、または対面のみで実施。日本語上級専門家と国内の日本語ノンネイティブ教師が現地に赴き、協働で講義やワークショップを行う。ネットワーク形成や日本語教育関連知識の拡充と同時に、国内でリーダー的立場となる日本語ノンネイティブ教師の育成も目指す。
- 教師のための日本語コース（旧称「日本語ブラッシュアップ講座」）：メキシコ・中米カリブ地域の主に日本語ノンネイティブ教師を対象に、オンライン形式のコースを実施している。2025 年は「いろいろ日本語オンラインコース」を使用して、日本語ノンネイティブ教師の日本語ブラッシュアップと教材の活用方法を学ぶことを目的としたコースを実施した。
- 中米カリブ日本語教師対象研修：中米カリブ地域の現職日本語教師を対象に、各国のニーズに応じてオンラインまたは対面でセミナーやワークショップを実施している。
- その他、機関や団体からの要請を受けて『まるごと 日本のことばと文化』（前出）の使い方に関する研修を随時実施。

6. 教師会

日本語教育関係のネットワークの状況

1989年、日本語教師組織として、メキシコシティにおいて「メキシコ日本語教師連絡協議会」が発足した。同会は全国規模の教師ネットワーク形成を図ることをめざし、2003年には「社団法人メキシコ日本語教師会（Asociación Mexicana del Idioma Japonés A.C.）」へと組織が再編成された。メキシコ日本語教師会は、国内外に97名（2026年1月現在）の会員がいる。

メキシコ日本語教師会の主な活動としては、毎年国内外から講師を招へいして行われる「メキシコ日本語教育シンポジウム」や比較的経験の少ない日本語教師を対象にした「夏季短期集中講座」などがある。また、地方支部主催日本語弁論大会もしばらく中断されていたが、2023年から北部日本語弁論大会が再開された。一方、パンデミック中に普及・定着したオンラインの特性を生かし学習者奨励活動も実施されており、オンライン多読クラブ「よもうかい」が毎週開催されており、「中級ディスカッションクラブ」も定期的に開催されている。

最新動向

2025年3月「ビジネスで使われる日本語を教える」をテーマに「第30回日本語教育シンポジウム」をハイブリッド形式で開催。

[教師会・学会一覧へ](#)

7.日本語教師派遣情報

国際交流基金からの派遣

日本語上級専門家

JFメキシコ日本文化センター 1名

日本語専門家

JFメキシコ日本文化センター 1名

その他からの派遣

（情報なし）

8.シラバス・ガイドライン

統一シラバス、ガイドライン、カリキュラムは確認されていない。

9.評価・試験

日本語能力試験が日本語運用力を測る一つの基準として浸透しており、7月の第1回はメリダとアグアスカリエ

ンテスの2都市、12月の第2回はメキシコシティ、モンテレイ、アグアスカリエンテスの3都市で実施されている。2025年第1回の受験応募者数はメリダが167名、アグアスカリエンテスが301名、同年第2回の受験応募者数はメキシコシティが1,141名、モンテレイが320名、アグアスカリエンテスが259名。各会場で受験人数に上限を設けて実施している。

10.日本語教育略史

1897年 5月	榎本殖民団 35名がメキシコ チアパス州アカコヤグア村に到着
1906年	同村にメキシコ最初の日本語教育機関アウロラ（暁）小学校が開校
1930年	墨都日本語学園開校（墨都日本人会経営 日本政府が補助）
1944年	中央学園開校（日本語補習校）
1945年	タクバ学園開校（日本語補習校 1945年～77年）
1964年	エル・コレヒオ・デ・メヒコ アジア・アフリカ研究所日本研究科設置
1967年	日本大使館内にメキシコオリンピックのための通訳養成講座開設
1967-75年	メキシコ国立自治大学文学部に東洋研究所日本学科設置（67～75年）
1975年	メキシコ国立自治大学外国語教育センターに日本語講座開設
1977年 9月	日本メキシコ学院開校（日本・メキシコ両コースが設置された国際校）
1981年 1月	第1回メキシコ日本語弁論大会開催（主催：メキシコ国立自治大学）
1984年 12月	第1回日本語能力試験実施（メキシコシティ）
1987年 8月	JFメキシコ日本文化センター開設
1989年 10月	メキシコ日本語教師連絡協議会発足（メキシコ市内の12機関による）
1990年 8月	第1回日本語教育シンポジウム開催（主催：日本語教師連絡協議会）
1991年 10月	第1回メキシコ日本語教育研究大会開催（主催：JICA）
1992年 10月	第1回子どもの日本語話し方大会開催（主催：日墨協会）
1998年 10月	第1回日本語ブラッシュアップコース開催（～2007年まで毎年実施）

1999年7月	第1回メキシコ人日本語教師研修コース夏期集中講座開催（2008年より日本語教師短期集中講座に名称変更）
2000年	グアダラハラ市に「グアダラハラ日本語教師勉強会」発足
2002年2月	Asociación Mexicana del Idioma Japonés（メキシコ日本語教師会）設立準備委員会発足（メキシコ日本語教師連絡協議会から移行）
2003年5月	第20回メキシコ日本語弁論大会開催（日本語教師会主催）
2003年7月	メキシコ日本語教師会が社団法人認可を取得
2003年11月	第1回ベラクルス州日本語弁論大会開催
2004年11月	日墨文化フォーラム（日本語教育シンポジウム）開催（主催：エル・コレヒオ・デ・メヒコ）
2005年10月	第1回メキシコ中部地方（グアナファト州、ハリスコ州、ケレタロ州）日本語弁論大会開催
2007年4月	第1回ヌエボ・レオン州日本語スピーチコンテスト開催
2008年3月	日本語教育ボランティア事業実施（基金、教師会共催）
2008年5月	第25回メキシコ日本語弁論大会開催
2009年3月	メキシコ日本語教師会がJF さくら中核メンバーとして認定
2009年11月	教師勉強会地方巡回指導を開催（メヒカリ市、グアダラハラ市）
2010年10月	第1回メキシコ北部日本語弁論大会開催
2010年12月	モンテレイ市にて日本語能力試験実施（国内2都市目）
2012年1月	日墨文化学院と共催でJF日本語講座を開講（三井物産への出講講座 2012年1月～2013年12月）
2012年8月	日本メキシコ学院高校部新入生クラスでJF日本語講座を開講
2013年1月	アジア研究学会でJF日本語講座を開講（1月～12月）
2013年8月	日本メキシコ学院中学部の一部でJF日本語講座を開講

2014年5月	JF メキシコ日本文化センターで JF 日本語講座を開講
2015年8月	日本メキシコ学院中学部・高校部すべてのクラスで『まるごと』使用 日本メキシコ学院がさくらネットワークメンバーとして認定 グアナファト大学付属高校グアナファト校・サラマンカ校高専コース開講
2016年8月	日本語能力試験オンライン出願開始 コレヒオ・マグノ サラマンカ校開校
2018年1月	グアダラハラ大学ラゴス校サン・ファン・デ・ロス・ラゴスキャンパスに外国語・外国文化学部日本語専攻開設
2019年7月	グアナファト州サラマンカ市にて日本語能力試験実施（国内3都市目） ※2021年度第2回試験をもって同会場での実施を終了
2021年7月	ユカタン州メリダ市にて日本語能力試験実施（国内4都市目）
2021年9月	ベラクルス州立大学と日墨協会日本語学校がさくらネットワークメンバーとして認定
2022年7月	アグアスカリエンテス州にて日本語能力試験実施（国内5都市目）
2023年12月	アグアスカリエンテス州にて日本語能力試験が年2回に（国内都市初）

情報更新についてのお願い

この国の日本語教育に関する情報がありましたらお知らせくださるようお願いいたします。

なお、内容の確認のため、こちらからご連絡する場合があります。

Eメール：kunibetsu@jpf.go.jp

（メールを送る際は、全角@マークを半角@マークに変更してください）